

氏 名 : 細川 かおり
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博乙第 1 1 3 号
学位授与年月日 : 令和 5 年 3 月 1 5 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 2 項該当 論文博士
学位論文名 : 知的障害幼児の相互交渉と遊びにおける関係論による発達臨床心理学的研究
論文審査委員 : (主査) 教授 橋本 創一
(副査) 教授 西垣 知佳子 准教授 駒 久美子
教授 岩川 直樹 教授 杉森 伸吉

学位論文要旨

保育フィールドにおける知的障害幼児と定型発達幼児の間の相互交渉は必ずしも良好とはいえず、その要因は知的障害に起因する発達の遅れにあると考えられる。しかし知的発達幼児が対等な関係で定型発達児と相互交渉し、仲間関係を構築することはできないだろうかという問いである。本件研究では、まず知的障害幼児の遊びの発達特性を分析し、ついで保育フィールドにおける相互交渉と保育者の支援を関係論的に分析し支援方法について検討することを目的とした。

序論は第 1 節から第 5 節で構成されている。第 1 節では、知的障害の定義及び ICF では障害の状態に影響する因子として個人因子と環境因子が位置づけられていることを述べた。第 2 節では知的障害幼児の遊びの発達について幼児期の代表的な遊びである象徴遊びとルール遊びを中心に先行研究を概観した。第 3 節では保育フィールドにおける障害児の保育の理念と障害児の保育の現状について述べたが、近年はインクルーシブからの保育が求められている。第 4 節では知的障害幼児の仲間関係についての研究を概観した。知的障害幼児の仲間関係は相互交渉研究として多くなされてきたが、個体能力論と関係論の立場 (及川, 2016) から論じ、これまでの支援は SST などの個体能力論からのアプローチが多かったことを指摘し、関係論からのアプローチも必要であることを論じた。第 5 節では関係論の論理的枠組みについて述べた。

本論は第 3 章から第 6 章 (研究 1 から研究 9) から構成される。第 3 章 (研究 1, 研究 2) ではプレイルームで観察を行い知的障害幼児の遊びの発達特徴を明らかにした。研究 1 では象徴遊びの発達について DA をマッチングした定型発達児と比較検討したところ、象徴遊びの出現は DA と相関しているが高次の項目の出現は DA を指標にしても遅れていた。研究 2 では遊びにおけるルール理解について、知的障害幼児 7 名に対して手つなぎ鬼を 6 ヶ月間支援しながら検討した結果、2 名についてはルールを理解できたと考えられた。いずれも障害特性に起因する認知発達の遅れが関連していると推測された。

第 4 章 (研究 3, 研究 4, 研究 5) では、保育フィールドの障害児の保育の現状について保育所を対象に調査した。0 歳から 2 歳児クラスにおいても 76.6%の園で特別な配慮を必要としてい

る子どもがおり知的障害（39.2%）が最も多かった。乳幼児期の障害の特性から障害の有無が明確でない子どもが多く保育されていた。園内での支援は従来から行われている保育の枠組みを活用して行われていた。乳児保育、幼児保育いずれにおいても特別な支援方法の適用よりも保育カリキュラムの特性から生活や遊びの中での支援が多く、「配慮された保育としての支援」（北原，2013）が行われていた。また、保育者が知的障害幼児との対等な仲間関係形成への意識を GTA により分析したところ（5章，研究7），肯定的側面も否定的側面を含めて遊びの力が重視されていた（研究7）。

第5章（研究6）及び第6章（研究8，研究9）は保育フィールドにおいて観察を行い，関係論的に分析し保育者の支援について考察した。第5章（研究6）では，衝動的に手が出ることによって頻回にトラブルを起こしていた2名（A児，B児）の幼児が，遊びの内容，活動内容が変容することによって仲間との関係が変容し，クラス全員での活動（お店屋さんごっこ）に参加していった過程について分析した。保育者は子どもの遊びを支援していった。正統的周辺参加論（Lave & Wenger, 1990/1993）を援用しながら参加過程を考察した。

第6章（研究8，研究9）では，まず知的障害幼児がクラスの定型発達幼児とどのような仲間関係をもっているのかについて分析した（研究8）。34 エピソードを分析した結果，排除的關係が多く仲間関係は良好とはいえなかった。しかし，保育者が入り対等な関係で相互交渉し，遊びを発展させていったエピソードが2あった。研究9ではこの2エピソードについて遊びでの相互交渉における関係性の変容について接面（1999，2016）を援用して検討し，接面が形成される過程でもの，人，ことがどのように媒介して状況が生成されていったかについて分析した。また保育者の発話を分析した結果，遊びの文脈内で子どもを活動に巻き込むシェアリングボイス（石黒，2004）を用いていることが明らかになった。

結論（第7章）では小括及び総合考察を行った。保育フィールドにおける支援は保育カリキュラムの中での「配慮された保育としての支援」（北原，2013）として行われている現状を踏まえ，関係論からの支援の意義及び，仲間関係の発達モデル，及び支援モデルについて論じた。事例研究の限界と保育フィールドでの研究の積み重ねによる精緻化が今後の課題である。